

H11-11-16 M6 新聞

風の方

No.6

フリージャーナリスト 加藤 勝美

ペシャワール・メディカル・サービス院長

中村哲さん

<上>

「面従腹背という言葉は彼らのためにあるのではない。も付き合いたくないと思うのか。にこやかな挨拶は目の前を過ぎれば罵倒に代わる。忠実さはしばしば敵意がないこととの表明であり、敵と思えばその不幸を喜び、利害得失の前には簡単に心をひるがえし、悪いことも良いことも、弱さも強さも単純で分かりやすく、天真爛漫、性悪でかつ貴族的な高貴さを秘めている。物見高く、自由で気儘、衝動的で粗野、割拠対立と滑稽なほどに高い自尊心」

これは半分がアフガニスタンの北西辺境州に住む千五百万人のパシュトゥン部族について中村さんが述べていること

日本発の 国境なき医療活動

年日本人技師たちが人質として拉致されたウズベキスタンの南東部で国境を接している。

中村さんが初めてパキスタンを訪れたのは一九七八年、カラコルムのヒンドクッシユ山脈の最高峰で、アフガニスタンとパキスタンを隔てるティリチ・ミール遠征隊に参加した時で、カラコルムの自然と蝶に誘われてのことだった。途中、病人を診ながらキャラバンを続けたが、トラコーマで失明寸前の老人や病人に「待ってください」と追いつがられながらも見捨てざるをえないという体験が、後ろめたさを残した。

そして八二年、クリスチャンである中村さんは日本キリスト教海外医療協力会から派遣されてパキスタンのペシャワール・ミッション病院の下見に来た時、初めてらしい患者に接し、八四年には北西辺境州政府のらいコントロール計画に民間人として協力するた

め、この病院に赴任した。

ここらひい病院の治療器具は故障したオープン式消毒器、切れない包帯裁断用はさみ、使い古しの使い捨て注射器五本、壊れた聴診器一本など惨憺たるものだった。中村さんは消毒と清潔(無菌状態)の観念を植えつけることから手をつけたが、急いで強制して、元の木阿弥になってはいけな。そこで現地のスタッフに「誇りをもたせる、地元方式」を取った。まず、ほかの病院の悪い例を引き合いに出し、不潔なため病気になる、とか、血清肝炎で死亡した実例をあげ、「医療関係者としてあるまじきこと。まさか君

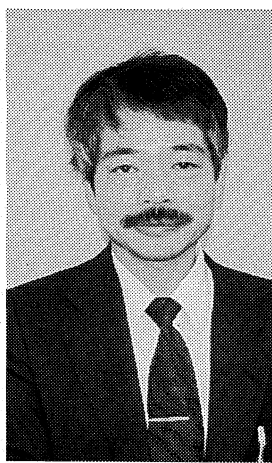
達はそのまじきことあるまい」と言う。「そんなことは常識だ」と返事が来るから、そこで汚い注射器などを見せる、と、「それは病院当局が要求どおり病棟に配らないからだ」と他人のせいにする。

翌日、真新しい多くのピンセットとガラスの注射器を全員に示して、消毒の原理を説明する。わからなくても専門用語を交えて、彼らの自尊心を満足させ、その後は実地指導を根気よく繰り返して「われらの病棟はペシャワールで最も清潔な病棟はペシャワールで」という矜持を植えつけていく。二年後は首都カラチの病院本部に在るドイツ人医師から「中村医師は奇蹟を実現した。小さな病棟は一個の宝石である」と評価されるまでになった。

実は中村さんが来た当時、着任したばかりのドイツ人看護婦が病棟責任者だったが、古くからの現地人スタッフに命令口調で接して、不信感と屈辱感を抱かせ、結局本人が疲れ果てて一年後に病棟を去っていった。この病院はイギリスの統治時代、国教会によって開かれたものだが、中村さんはイギリス宣教師団体の功罪についてこう述べている。「管理面での欠陥は独立自尊の風を封殺して、召使のような使い方をしてきたことである。致命的なのは、インド的なヒエラルヒー(身分制)を温存して秩序を作り、上層の協力者にエリート意識を植えつけた点である。英国人による管理が失われると、今度はこれら協力者たちが英人に取り替わって代わる支配層になる」とする傾向が目立つ。

〔中村哲「ペシャワールにて」五四ページ。石風社〇九二一七四一四八三八〕

福岡市出身の中村さん(一九四六年生まれ)の活動を日本国内で支えているのが、パキスタンの都市の名に由来する



中村さんはパキスタンの病院で現地スタッフに誇りをもたせる「地元方式」をとった

(この項つづく)

ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区大名一〇一〇二五 上村第二ビル 三〇七号 ☎〇九二一七三二二(ホームページ) <http://www.meshnet.or.jp/~peshawar/> (電子メール) peshawar@mx.meshnet.or.jp